

津高同窓会報

発行所

〒514-0042 津市新町3丁目1-1

津高等学校
同窓会事務局

TEL・FAX 059-229-7331
共立印刷株式会社

今、回想のとき、 そして出発のとき



同窓会長 飯田 俊 司（昭和36年卒）

会員の皆様には、平素より同窓会活動に格別のご協力を賜り厚くお礼申し上げます。

今年は、五月に志摩市賢島で伊勢志摩サミットが開催されました。美しい自然景観、豊かな文化・伝統を誇る三重県の知名度向上による今後の発展が期待されます。

一方、日本列島は地震、台風、集中豪雨、火山噴火などで甚大な被害を受けました。なかでも熊本県は四月に二度に及ぶ震度7の大地震、六月に集中豪雨、九月に阿蘇山噴火に襲われ、ま

た東日本大震災からの復興途上の岩手県には八月に観測史上初めての台風が上陸するなど特定の地域で被害が重なりました。四季があり、温暖な気候の日本は世界でも有数の自然環境に恵まれた国ですが、過酷さとも隣り合わせだと改めて思い知らされました。

今年の同窓会活動を振り返ってみますと、五月には学年対抗ゴルフ大会、東京同窓会、八月には同窓会総会、九月には名古屋同窓会、十月にはテニス大会、十一月には大阪同窓会がそれぞれ盛大に開催されました。各行事とも参加者は増加傾向にあり、幹事の皆様のご努力のお陰と改めてお礼申し上げます。

また、十月には第六回「有造塾」を開催しました。CMプランナー&コピーライターで、KDDI & auのテレビ

コマーシャル「三太郎」の企画制作に携わった平成三年卒の篠原誠さんを講師に、在校生全員と同窓会員五十五名に対し、「考える・選ぶ・実行する」をテーマに講演していただき大好評でした。



「モチツモタレツモタレツツ」彫塑 ガラス アクリル着彩
植野のぞみ（平成14年卒）

タイトル・書 工藤雅俊（昭和45年卒）

生を対象に開催しております。有造館の第3代督学（学長）の齋藤拙堂は儒学者、文章家ですが、文武両道を奨励し、図書館の充実、洋学館、演武場の設立など有造館の充実を図り、天下の三大藩校と言われるまでに高めました。退任後は津市の茶磨山荘で余生を送り、拙堂の下へ吉田松陰、横井小楠、河井継之助、吉田東洋など維新史に名を残

す人々が来訪しました。本年八月十四日に拙堂第五代玄孫で昭和二十三年津中卒の齋藤正和氏が津市の比佐豆知神社境内に山荘跡記念碑を建立されましたが、津高の歴史を身近に感じる思いでした。

津高及び津高同窓会のみますの発展と皆様のご健勝・ご多幸をお祈りします。

ご挨拶	2	祖父 福岡法重と父 小林尚志が遺したもの	5	郷土を知ること	8
米寿同窓会	2	伊勢志摩サミットの	3	第六回有造塾に参加して	9
三重桜の絆	3	ありがとう津高	3	進路状況	9
「T・M君のこと」	4	同窓会より熊本地震に義援金をいただいて	4	津高校同窓会ゴルフ大会	10
				第六回津校同窓会テニス大会	10
				各地で同窓会開催	10
				平成二十八年度総会バーティー	12

ご挨拶

学校長 中川 弘文



三重県立鳥羽高等学校から着任いたしました。よろしくお願い申し上げます。

会員の皆様には、ご健勝で、活躍のこととお慶び申し上げます。平素は、本校の教育活動へご理解とご支援を賜り、心から感謝申し上げます。本年四月、小野芳孝校長の定年退職に伴い、

史に裏打ちされたネットワークの素晴らしさを感じています。

本校は「自主・自律」の校訓のもと、高い知性と教養を持ったリーダーが育つ学校を目指し、教職員一丸となつて教育活動を展開しています。

生徒は生き生きと高校生活を謳歌しています。三年生は進路決定の大詰めを迎え、一段と学習に力が入っています。何人かは今夏、初めての投票による政治参加も経験しました。また、四月には伊勢志摩サミットに先立つ「ジュニア・サミット」に、三年生が日本代表として参加、夏休みにはマレーシア研修や大学での実習等、多くの生徒が

主体的な学習活動を行い、大いに成長を遂げています。

部活動もそれぞれが大健闘し、県総体ではボート部は男女で全国総体出場、陸上部、水泳部が東海大会出場を果たしました。吹奏楽部、合唱部は県大会を突破し、東海大会に出場するとともに、書道部、新聞・写真部、将棋部が全国高校総合文化祭に参加しました。何事にもメリハリをつけ、頑張りぬく、「文武両道」「自主・自律」の伝統は着実に受け継がれています。

国の大きな教育制度改革の中で、センター試験を含む大学入試も様変わりし、総合的な課題解決能力や論理的思

を募らせてみな体を乗り出して語り出します。

齢を取ると最近の記憶は頭に残らないが、昔のことは鮮明に脳に刻まれているから、誰それと何をした、何を語り合ったとか、喧嘩の話、友情の話、特に戦争中の勤労動員の話など想い出話に青春が蘇り米寿と言つ白秋の年齢に生気が宿り一瞬青春の年齢になるから不思議である。当時の友達の名前や

綽名、特に先生の綽名が出るとそれらの面影が脳裏に浮かび一段と懐かしさを覚える。青春時代の話は齢を取るほど心が青春を呼び戻すようで、それが嬉しくまた求めるところとなり、加えて長生きの薬ともなつて今日に至っている。昨年の卒業七十周年を記念した同窓会で終止符を打とうかと持ちかけ

考が試される時代を迎えます。本校はこれまで、人間力の育成を大切に、「凡事徹底」「自主・自律」を教育活動の根幹に据えてきました。同時にスパー・サイエンス・ハイスクールとして先進的な取組も行っています。本校の取組は時代がまさに求めるものと言えます。校長として、取組の精度を高めつつ、時代の不易流行を見極め、チャレンジ精神を持って学校運営に邁進したいと思っています。

会員の皆様におかれましては、今後母校に対するご支援をお願い申し上げますとともに、益々のご健勝と活躍をお祈り申し上げます。

たら、集まれる間は集まろうと声が掛かり、今年も会を開いたが、流石に集まる人は限られてきて米寿を以て幕を引くことになった。

学窓を出てそれぞれの人生を歩み出した時、一緒に学んだ者同士が同窓会で顔を合わすことは温故知新の意義もあり、又新しい人生の道を開く重要な事柄でもあり、何処の学校でも同窓会を重んじる所以である。

然し、年齢を重ねて行くにつれ仲間から、幽冥境を異にする人が出てくるのは悲しいことだが止むを得ない。また足腰の病等やむなく欠席する人も出てきて、サバイバルの如く人数が減って行く中を、残った者同士が同窓会を続けて来たのが米寿同窓会とも言え、友情と絆と言つて誠に意義深い。

米寿同窓会

林 和彦 (昭和20年卒「5年」)



る。その米寿同窓会を三月二十六日、東京都千代田区内幸町のパブレストラン「うすけぼー」で開き、七名が東京近辺及び三重県から馳せ参じた。

六十一期生同窓生の始まりは平成六年、津高東京同窓会が霞が関ビルで行われた際、我が同級生も十人ほど出席し同じテーブルに顔を並べた。そこで我々六十一期生だけの同窓会を開こうではないかと話が持ち上がり、関東地区在住者や三重県在住者有志に声をかけたところ三十人ほどの賛同者を得て、卒業五十周年である翌平成七年二月、東京都千代田区の前述パブレストラン

津中第六十一期生は、昭和二十年終戦の年の三月、五年生で卒業したので今年は卒業七十一周年を迎えたことになる。また、六十一期生の主体は昭和二年生まれと昭和三年早生まれであるため、昭和九十一年に当たる今年で全員八十八歳(米寿)を迎えたことにな

しかし体力が衰退して行くのは避けられず、今年米寿で集まったのは僅か七人の侍であった。そこに限界を悟り米

三重桜の絆

池田 タツ子 (昭和19年卒)



友人からの依頼を受け、作文の苦手な私がペンを取る羽目になってしまいました。

昭和十四年四月三重県立津高等女学校に入学し、先輩の方は定員一五〇名でしたが私たちの学年から二〇〇名に増え、先生方から「五〇名だけアホが入った」と言い続けられ、叱られながら卒業した学年であり、私もその中の一人です。「ちょっと勉強せん」「よう騒ぐ」「言つこと聞かん」と言われ続け、果ては数学の本城先生に「あんたらは寅年やそうやな、嫁入りの角かくしは鉄かぶとにせい」とまで言われました。しかしそのために皆が仲良く助け合い生徒の団結が強くなったというわけでしょう。その甲斐あって今でも同窓会にもたくさん出席し、以前に今村先生から「あなた方の学年はいつ

寿まで続いた我が津中第六十一期生同窓会を無上の誇りとして掉尾を飾ったが、皆さんの同窓会も同期の桜が何時

までも咲き誇るよつ心から願って筆を擱く。

もたくさん出席してくれて、三重桜の優等生ね」とほめられました。「卒業してからほめられてもね」と笑ったことでした。クラス会もずっと続け本年

五月に卒寿の祝いをして幕を閉じました。なつかしい顔を合わせ、亡き友人を偲び昔話に大笑いの花を咲かせて楽しみ、「次のクラス会は天国でね」と約束して別れました。

老春真っ直中の九十歳の現在もボーラ化粧品に籍を置き、お客様に美と健康をお届けしております。

ありがとう津高

丸岡 良雄 (昭和31年卒)



きた。

小中高と良き師に巡り会った私は、教職に就くことが夢になった。津高を経て、東京学芸大学を卒業、その後多少の迂曲はあったが、若くして待望の「先生」になった。以来川崎市の公立高等学校に三十数年、平教員のまま六十歳定年、その後は野球で知られた浦和学院、湘南学院など私学の講師、同時に川崎市の老人福祉センター数力所で、シニア対象の古典講座を担当して

七十八歳の現在、その名残とも言うべき流れで、私的な古典講座を東京、川崎、横浜で持っている。『万葉集』『源氏物語』『枕草子』『方丈記』『徒然草』『おくのほそ道』などを、多くは高齢者の方々と楽しんで読んでいます。もはや仕事と言うよりは趣味の域に入

るのだが。

さて、私が津高にお世話になったのは、昭和二十八年からの三年間、当時はまだ終戦の余韻が残っていたが、日本は新しい国の創造を模索して活気に満ちていた。津高も例外ではない。後年私が教師になって、教わった津高を教える立場で再吟味できるようになった。そこで確信したのは、津高には学

休日はお正月三日と日曜のみで、その他は休みなく仕事に精を出してあります。この八月四日にはボーラ化粧品本舗全国大会で勤続六十年以上の表彰式に招待され、杖もつかず壇上に登らせていただくことができました。

これはひとえに健康な体に生んでくれた両親、そして私を取り巻いて下さる多くのお客様、それに家族の協力があってのこと、その絆の強さをひしひしと感じており、ありがとうという

校・教育の理想の姿があったということである。

字数に余裕はないので箇条書きにしてみるが同窓生や在校生の皆様には理解されるに違いないと思っている。

- ★自由と規律
- ★笑いと遊び心
- ★進取の気風
- ★自主独立の精神
- ★微視よりも巨視の重視
- ★権力に迎合しない気骨
- ★学問の尊重
- ★形よりも実質重視
- ★地域の重視
- ★文武両道
- ★友情と連帯
- ★マイノリティ、弱者の尊重
- ★コンプレックスからの解放
- ★荒唐無稽な発想にも耳を傾ける懐の深さ

感謝の気持ちでいっぱいになります。この仕事を六十三年続けさせていたでくことよって先輩後輩との心のつながりを感じ、喜ばれることに飲びを感じるようになりました。

三重桜の「心の掟」にある「業務に励み善行を積み美しき一日を過さん」を肝に銘じ、皆様から受けた恩に報いるため命有る限り絆を大切に、毎日感謝の日々にしていきたいと思えます。

の高校生活は負の側面がゼロではなかったが、それを差し引いてもなお余りある素晴らしきであった。

さて、私が卒業後母校を訪問したのは七十歳になってから。校門の蘇鉄を眺め、門柱に頼りいただけで、同窓生としてはほめられるものではない。しかし、津高を忘れることはなかった。津高のあり方の多くを目標にして教員生活を続けてきた。それはささやかな講座を担当している現在も変わらない。拙稿を推薦してくださったのも津高の卒業生、伊藤淳子さんである。本会報の前号で、彼女の文章とともに、私の同級生西井晃君のもあった。が、編集者の卦報の添え書きがあり胸が痛んだ。

榊原中学から津高に入学した男子四人のクラスメートのうちすでに二人が鬼籍に入った。私にもその日は近い。しかし、残された日々がたとえ短くと

も、それだけに大切に大切に生きていきたい。明るく日々を過ごしたい。いくつになっても小さな夢を持ち続けた

『T・M君の、いつ』

三輪 征夫(昭和35年卒)



昭和三十五年三月に津高校を卒業した私は、翌四月、大学進学のため東京する事になりました。

東京に知己のいなかった私は、親しかった同級生の岩崎君と、彼の従兄で一年先輩の神田さんの下宿に一先ず転がり込んだのが、その後の私の人生に大きなインパクトを与えた、ある男との出会いの伏線だったのです。

神田さんの下宿は、高級住宅街として有名な町で、閑静な町並みが気に入り、私もその町で安い下宿を探し、四年間住み着く事になりました。

しばらくすると下宿の近くに、「東宝映画砧撮影所」がある事がわかったのです。

職業軍人であった父が戦後地方公務員として働く、裕福とは言えない家庭だったので、大学四年間はアルバイト

い。微力でも社会に貢献したい。そんな私の人生観、人生の骨組みを与えてくださった津高の師と友と、今日まで

をして生活費を稼ぐ必要がありました。

子どもの頃から映画が大好きだったこともあって、早速「砧撮影所」でのアルバイトを申し込み、製作担当の下働きとして採用され、卒業までの四年間お世話になりました。

当時の東宝映画は、三船敏郎の「用心棒」「天国と地獄」「椿三十郎」「赤ひげ」や、特撮で有名な「ゴジラ」また楽しいところでは、クレイジーの「無責任男シリーズ」、森繁久弥の「社長シリーズ」、加山雄三の「若大将シリーズ」等々、人気作品が目白押しで十三あるスタジオは大変な活況を呈していました。

撮影所に通い出して二年程経った頃、一人の若手俳優がデビューしました。

とても爽やかな日本人離れした、それでいて憂いを含んだ独特の個性を持つ彼は、一躍若手トップスターとして注目されました。

あちらは注目の若手スター、こちらは学生アルバイトですが、最初は何の接点もなかったのですが、毎日の様に顔を会わせているうちに、やがて朝は挨拶を交わし、昼休みには埒もない

で支えてくださった関係者の皆様へ、一言遺しておきたい。

「ありがとう津高」(古典講座講師)

世間話をするようになりました。

大学卒業後、私は日本鋼管㈱に勤め二十余年経っていたのですが、名古屋支社に転勤になって間もなく、東京本社出張の帰路、東京駅新幹線ホームで、京都へ撮影に行くと言った彼とバッタリ会ったのです。

彼の名前はT・M君と言います、今は舞台にも立ち、名古屋での公演も年に一、二度はあると言ったので、名古屋での再会を約束しました。その後、彼は名古屋に来る度連絡をくれ、居酒屋で酒を飲みながら映画談議に花を咲かせ、映画への思いを熱く語ってくれました。

ある時、彼は仲間を集めて映画を作ったと言ったのです。唯、予算が足りなく一般公開を諦めて「DVD」に収録し、東京では上映会を何回か開いているので、是非名古屋でも上映会を開いて欲しいと言いだしたのです。

彼は私より二歳年下でしたが「人生前向きに生きようよ」、「人間生きてる間は、できる事には挑戦しようよ」と言っ、しっかりと強い信念の持ち主でした。

そして、究極の挑戦が沖縄宮古島のトライアスロンでした。

水泳三キロ、自転車百五十五キロ、最後にフルマラソン四十二・一九五キ

ロ、これを十四時間で完走すると言った国内でも一二を争うハードな鉄人レース、しかも彼は何と五十六歳から挑戦を始め、六十四歳まで毎年完走し、その宮古島のトライアスロンを扱った映画を作ったと言ったのです。

その後、その映画を観せてもらった時、私は感動で何度も涙を流しました。「よし、上映会やろうよ!」

そんな約束をした次の年の夏、最初の上映会開催が決まり、彼も舞台挨拶を楽しみにしていた矢先、癌が発覚、結局舞台挨拶もできないまま、そして次の宮古島を楽しみにしながら六十五歳と言った若さで、帰らぬ人となってしまいました。

「絶対復活するから、舞台挨拶も必ず行くから!」そんな電話の声と、あ

の人懐っこい笑顔が今も臉に浮かびます。

あれから八年の歳月が流れました、今年も名古屋で九回目となる上映会を開催する事ができました。T・M君の映画への熱い思い、人生に対するアクレッシブな情熱を一人でも多くの人に伝えたい、観てもらいたい、そんな思いからこの上映会を続けています。

私に「男の生き方、人生でできる事は挑戦する」、そんな情熱を身をもって示し、私の人生観に大きなインパクトを与えた男、T・M君。

津高校、岩崎君、そしてT・M君、この三者との出会いが、今も私に「前向きに生きる人生、できる事には挑戦する人生」そんな生き方を教えてくれています。

同窓会より熊本地震に 義援金をいただいて

三好(奥山)益生(昭和37年卒)



五十年になります。第二の故郷のごとく慣れ親しんでいた地で、こんなにも恐ろしく悲しく感じる出来事が起こる日が来るとは想像だにしませんでした。熊本は台風がよく来るとの印象はありますが、県の企業誘致の広報誌に、「地震の少ない熊本へどっぞ」というキャッチフレーズがあるように、ほとんどの県民が地震は起こらないと思

昭和四十一年四月に就職して津市から熊本市に移り住み、今年でちょうど

いがありました。ところが、平成二十八年四月十四日午後九時二十六分に震度7(M6・5)の前震、その二十八時間後の十六日午前一時二十五分に震度7(M7・3)の本震が起こりました。日本で震度7が続けて発生したのは観測史上初めてです。

本震は就寝中に発生、ドンという大きな音がし、次に縦の突き上げがきて、続いての横揺れに立つこともできない状態が二十五秒間続きました。これは夢ではないかと一瞬疑いましたが、現実の世界で起きた事象でした。あまりにも揺れが激しく続いたので、駐車場に一時、避難しました。その日は余震が続き、その回数が千二百二十三回に達し、一日中揺れている状態でした。地震の被害は、死者五十名、震災関連死四十三名、建物被害約十七万棟に及び、特にシンボルの存在の熊本城も被災し、その状況は新聞、テレビに何回も報道されたので皆さんもよくご存知かと思えます。ちなみにその熊本城は、私の自宅から徒歩で五分ぐらいのところにあります。

私の自宅は、住んでいる地域の関係で鉄骨建ての一軒家を四年前に新築したため、幸いにも食器類が少し割れた程度で住宅の被害は受けませんでした。ただ、ライフラインの復旧遅れで、二週間ぐらい不自由な生活をしました。

私には子供三人と孫六人がいます。長男の家族はパリに在住しておりますが、安否の電話が一番早くかかってき

たので、情報の速さには驚きました。娘二人の家族は熊本市内に住んでいますが、幸いにも私と同じ程度しか被害を受けませんでした。ただ、孫は今年新一年生で入学式を終え、ランドセルを背に一日だけ登校したのみで休校になり、寂しい思いをしておりますが、一ヵ月後学校が再開して、毎日喜んで

学校に通っております。あの震災を受け、五ヶ月が経ち、余震は四千回を超えましたが、今は一日の余震が数回に減り、近いうちに終息するとの期待を持っています。今回の震災で感じたことは、今の科学では地震の発生を予知できない、地震が発生した時に自分なりにどう対応するかがいかに大切であ

祖父 福岡法重と

父 小林尚志が遺したもの

小林 英 俊 (昭和46年卒)



て越える障害物競走の映像からは、運動会の様子が生き生きと伝わってきます。当時の質実剛健な校風が見て取れます。この動画は、前年津中に着任した祖父 福岡法重が小型ムービーカメラのパティ・ベビーを使って撮影したものです。

平成二十七年津高同窓会総会・パーティーに出席された方はご覧になられたと思います。この時、昭和五年、実に八十五年前の津中運動会の動画が上映されました。古すぎるーとお思いの方もいらっしゃるかもしれませんが、この同窓会のテーマである「繋ぐ世代を超えて」に相応しい内容ではなかったかと思えます。グラウンドで剣道着と防具を着けた生徒が竹刀を振って集団戦を行う野仕合、また裸足で走り、高さ五メートル以上の柵をよじ登っ

平成二十二年三月十六日に父 小林尚志が八十五歳で亡くなり、遺品の中から膨大な量の写真乾板、写真フィルム、写真プリントやムービーフィルムが出てきて途方に暮れてしまいました。祖父、父ともに大の写真好きでしたが無理もないことです。捨てるのは容易いことでした。しかし、これらの写真や動画から二人や先祖のことを深く知ることができるのではないかと、ふと思いました。以来五年余りをかけてコッコツと画像のデジタル化と修復を

るかとしみじみわかりました。

復旧、復興は目に見えて進んでいるとは思いますが、今後の進捗を期待しているところです。ただ、公共交通機関は、ほとんど回復しましたので、皆さんも、熊本県を訪れる機会があれば、熊本市や阿蘇の被害状況を見られると、地震の激しさを実感できると思

行ってきました。ムービーフィルムは

テレシネによりデジタル画像化しました。ムービーフィルムの中には前記の津中運動会の動画のほかに、本居宣長の旧居や奥墓など、松阪への遠足の動画も含まれておりました。

祖父は昭和四年九月から神戸一中(現兵庫県立神戸高校)に転任する昭和六年十一月までの二年余り津中の英語の教師を務めました。写真は昭和六年七月、津中学校有志富士登山隊を撮影したものです。祖父は教育一筋に生き、戦後、新制四日市高校の初代校長

います。

最後になりましたが、今回の震災に對し、津高同窓会義援金をいただきまして。

また、ご心配や励ましをいただきありがとうございます。この場をお借りしまして感謝申し上げます。

を務めております。

父は昭和十七年に津中を卒業し、昭和二十八年から四十二年までの十四年間、津高の理科の教師を務めました。この間、電気部や放送部などの顧問を務めました。中でも電気部への力の入れようには凄まじいものがありました。アマチュア無線のクラブ局が国内で認可されて直ぐの昭和三十六年、県下の諸校に先駆けてクラブ局を開局しております。父の熱意は、父自身が誰よりも電気工作とアマチュア無線が好きだったことからくるものにほかなりませんが、部員にもしっかりと伝わったことは間違いないと思います。

今、津高校には電気部はありません。しかし、現在、電気部同窓会が活発な交流活動が続いております。これは父の遺産とも言えるでしょう。父は昭和六十年三月に津西高校長を最後に定年退職した後も教育に携わり続けました。父もまた教育一筋に生きた人間でした。私は父が亡くなるまで、家系のごく先祖のごとく、肉親のごとくで興味がありませんでした。しかし、父が亡



くなって初めて自分がどういう家系なのか、何者なのか、さっぱり分からないう、まるで糸の切れた麻のようにな心許無さを強く覚えました。以来、六年かけて写真、動画、音声テープ、

日記、書類などの遺品を集め、これらを丹念に整理し、国立国会図書館などでの調査と合わせ、祖父や父の小伝を書き、さらに総合して小林家の歴史を冊子に纏め上げました。同時に、祖父

が遺した希少性のある戦前の写真や動画を、縁のある津高校、神戸(かんべ)高校、上野高校、四日市高校、兵庫県立神戸高校の他、いくつかの歴史資料館にも寄贈しております。

この一連の作業には膨大な時間がかかり、大変ではありましたが、肉親や先祖の生き様、思い、あるいは系譜を知るとき、驚くほど深い満足感を覚えることができました。今では、祖父や

父が膨大な遺品を遺してくれたことに、むしろ感謝の念を覚えております。これも「繋ぐ」世代を超えて」なのでしょう、数世代ないし数十世代を超えてですが。

伊勢志摩サミットの開催に携わって

西城 昭 二(昭和52年卒)



推進本部」の看板を設置、いきなり県政記者のインタビューを受けました。一年に及ぶ未体験の日々の始まりでした。

昨年六月五日(金の午後六時過ぎ、羽田空港で安倍首相から、翌年日本で行われる主要国首脳会議(G7サミット)の開催地を三重県の伊勢志摩にする、と発表がありました。職場のテレビで知った私が鈴木知事から電話を受けたのは十数分後のこと、週明けから新設のサミット推進局に転任、との異動内示でした。土日を挟んだ八日朝八時半、県庁で知事と一緒に「サミット

着任早々は、官民一体となった推進組織の立ち上げなど体制づくりに追われました。ほどなく開催日が決まると、前回北海道洞爺湖の時より一か月半ほど早い日程に焦りを感じました。北海道を訪れ当時の関係者のお話を聞くなどして、全体像が見えてきたと思えたのは夏も終わりのことでした。

秋に入り、取組が本格化。私たちの役割は、安全で快適な会議環境を整えること、この機会に伊勢志摩のみな

ら三重県の魅力を発信するに尽きます。

安全な会議のため、警察や海上保安庁等により万全の警備態勢がとられたわけですが、私たちは予め説明会を開催し地元住民の皆様にご理解を得るための情報提供に努めました。情報発信は、十月上旬の開催二〇日前を皮切りに、五十日ごとにイベントを展開、吉田沙保里、小原久美子、平井堅といった県出身の著名人の皆様にもご協力をいただきました。

そして迎えたサミット当日。朝のニュースでは霧の英虞湾が映り予報も芳しくなかっただけに、神宮訪問中の首脳一行に陽が射す映像に鳥肌が立ちました。会議での食事には三重の地酒や食材等が数多く使われ、関係者の苦労が報われる思いでした。

運営資金の寄附、協賛・応援事業の展開など、多大なご支援を頂戴しました。また、県民の皆様には交通規制等でご不便をおかけしましたが、ご理解とご協力をいただきました。改めて厚くお礼申し上げます。

加えて私としては、随所で津高同窓の皆様のご支援やご尽力に接し、大変心強く感じていました。様々な任務に就かれ、また、役割を担われた皆様と出会い、励ましの言葉をいただいたことが、未知の仕事を進める上でどれほど有り難かったことでしょうか。



一年に及ぶ準備過程では、県内外の企業、団体の皆様に、職員の派遣から

最終的に提言書の形にまとめられたのは達成感があったし、とても感慨深かったです。その他、楽しかったことは各国代表と意見を交わしたり、議論の合間の休

ジュニア・サミット・三重

三年 稲 葉 陽 樹

今年の四月に「ジュニア・サミット

in 三重」に代表として参加した感想

を書かせていただきます。

参加した感想を一言でいうと稚拙な表現ですが、「すごく楽しかった」です。もちろん遊んではかりだったわけではありません。三日間に及んだ議論

はとても大変で、最終日に至っては午後十一時までドラフトというメンバーのアイデアを文に起こしてまとめたものの作成を行ったため、ホテルの部屋に帰ってから全く動けませんでした。



憩時間に「湯あみの島」の温泉に入っておしゃべりしたことです。それぞれの国の話をするのは新鮮で面白かったです。

ジュニア・サミットでの主な仕事は国際問題についてのディスカッション。県内の視察や分散型体験・交流行事などの関連行事も多数ありました。

昼休みにはセントヨゼフ女子学園の生徒によるハンドベル演奏がありました。そこでは県内の高校生の人達が付き添って説明をしてくれたり、地元の方があたたかく歓迎してくださったりして、参加者全員でとても充実して楽

しく勉強になった、と話していました。ジュニア・サミットに協力していただいたすべての人達に感謝しています。私はこの機会を通し人に感謝する心も学んだように思います。

ここまでは行事の紹介と感想を話してきましたが、私がこのジュニア・サミットで学んだことは二つあります。

一つ目は積極的に素早く行動することが大事だということです。活発な議論の場においては考える前にしゃべっていかないと、他の人が先に話し出してしまい、自分の意見を言えなくなってしまう。私はカナダ、アメリカ

イギリスの代表たちの会話に圧倒されてなかなか発言できませんでした。その上言おうと思ったことは全部言われてしまつたのです。もう存在を忘れられないように必死でした。このことは国際会議の場でも言えると思います。積極性と行動力は重要だと改めて感じました。

二つ目は「内容が肝心」ということです。いくら英語ができて話すものがなければ議論も会話もつまらなくなるといつことを実感しました。例えば会話だと質問攻めになってしまいます。これからは語学だけでなく中身も磨か

ハイヒールから長靴へ

梶山 美也 (昭和58年卒)

ある朝、西新宿の高層ビルにある四十一階の自分のオフィスから東京の街並みを眺めていると、珍しく父から電話が。いきなり「お前、俺の会社を継いでくれないか。」私「……」

私の実家は知多半島南端にある水産会社。荒くれ者の海の男たちが大勢いて、市場のセリから始まり、鮮魚の卸・加工・小売りをする本物の魚屋だ。

私は津高の卒業と同時に米国の大学に進んだ。卒業後は東京で広告代理店に入社。二十代は外資系企業を担当し、その企業と一緒に商品開発をしたり、宣伝計画を作ったりが仕事。自分が関わった物が、世の中に出ていくのが楽

しくて仕方なかった。その仕事が評価され、新しくオープンする高級ホテルにマーケティング責任者として招かれた。三十代は「パークハイアット東京」というホテルを立ち上げ、成功させていくことに没頭する。幸いそのホテルは国内のみならず、世界でも評判を呼び大成功。私も複数の部門を統括する支配人になり、充実した日々を送っていた。そんな私が「長靴はいて魚屋？あり得ない！」なんて最初は思ったのに、なぜか会社を継ぐことに。四十代は知多半島で魚にまみれる事になる。

魚屋人生の始まりは、聞くと涙、語るも涙。魚を扱って何十年の荒くれ男た



ちが「お前、社長の娘でただで社長かよ!」と全く言う事を聞いてくれない。指示を出そうが「お前が右と言うなら俺たちは左に行く」と反撃を受け

途方に暮れた。確かに魚の事はよく分からない。でも、いかに物を売るかという事を本職にしてきた私。この会社にはここにしかない強みがあるのに、誰も気付いていなくてもいいない

思った。例えば、セリ権を持ち地元の漁港で仕入れるのだから、獲れ立ての魚が販売出来る。なのに魚職人たちは、この魚は数日たっても旨いからと、安い時に大量にセリ落として数日間売ろうとする。「保存するのはお客様の冷蔵庫の中で!会社の冷蔵庫に置いておくな」と私。最初「お前は分かってねえ」と言っていた男たちが、お客様の「魚太郎で買った魚は、三日目でもおいしかった。本当に新鮮なのね」と言うのを聞き変化し始めた。

今では獲れてから三十分後にはピカピカの魚が並び、全員で売り切る。ちりめんも、例えば船が出る日でも、面倒だからと冷凍物しか並んでいなかったのに、今では午前中に泳いでいた魚が釜揚げされ、出来立てのちりめんが魚太郎に並ぶ。

なくてはと切実に感じました。

最後になりましたが今回の会議内容をまとめた提言書を読んでいただいたと思っています。国際問題の解決にはすべての国の協力が必要で、すべての人の意識改革なども必要になってきます。だからぜひ読んでほしいと思います。

これからも鍛錬を積み精進していこうと思っています。

(注: 提言書は「桑名ジュニアコミュニケーション」で検索してください。英語版と日本語の仮訳版が外務省のホームページにあります。)

また、食堂も残念な状態だった。地元で獲れる小魚は下処理が面倒。養殖の大型魚は効率が良いという理由で沢山使われていた。お客様は地魚を楽しみに来るのに、それを出せなくてどうするの?と、メニューの全面変更を強行した。「そんなの無理だ」と板前が叫ぶので、実現できるように大規模改装もした。結果、売上倍増。色んな新しい挑戦を、文句言いながらも一緒にやってくれたスタッフ。十年たった今ではかけがえのない仲間になっている。魚市場一つ、飲食店三つで始めた魚屋が、今では魚市場三つ、飲食店七つ、年商も三倍近くになった。高校時代に憧れた国際的な仕事からはかけ離れたけれど、長靴にはきかえて本当に良かったと思っている。

(魚太郎株式会社 代表取締役)

老人と海と私

辻 本 祐 介 (平成8年卒)



昔から文章を書くのが苦手だ。特に読書感想文。何となく選んだ「老人と海」。漠然と未来を憂い、目前のことに一喜一憂していた高校時代。老人の生き方が心に染みた。

二十年後、起業前の旅先にキューバを選んだ。筆者のヘミングウェイが晩年を過ごした国だ。五十年以上続いた経済制裁のため、資本主義経済の影響をあまり受けてきた。しかし、オバマ米大統領が国交正常化を発表。歴史的節目を迎える国で、自らの転換期を過ごしたかった。東京から十五時間、辿り着いたキューバは、青い空、青い海、陽気な音楽、美味しい酒、至福の葉巻、まさに楽園だった。スマホがつかない国で、日々の何気ない豊かさを再認識した。私は都会への憧れを胸に、三重を離れた。東北大学で建築を学び(実はバレーボールばかりしていたが)、東京はリクルートグループで不動産開発を手掛け、成長中のベンチャー企業に転職。三十代、これからとい

う二〇〇八年、リーマンショックの影響もあり、二百億円の負債を抱えた会社が民事再生に。転職の道もあったが、再生を誓い会社に残ると決めた。

一流大学に入り、一流企業に就職、出世して偉くなれば幸せに。なんてステレオタイプの成功シナリオは何処へやら。想定外の環境変化の中で、徹夜も厭わず仕事に追われた。

そんな中、京都の予備校関連施設の利活用の相談を受けた。高度成長期、旺盛な需要を見込み建設されたが、少子化の影響もあり二〇〇九年に閉館。元のまま教育施設として利用するか、

建物を建て直すのが一般的。本当にそれで良いのか。様々な検討を重ね、京都を代表するホテルとして再生。新しい事業モデルが生まれた。

後悔はなかった。仲間にも恵まれ、目の前の課題に一つ一つ取り組んで来たことで、自身の成長と人とのつながりを蓄えることができたからだ。そして昨年、新たなスポンサーに株式譲渡がなされたのを機に会社を辞め起業した。

現在は、主に京都でホテルや旅館、町家の再生を手掛けている。安倍政権が観光立国を目指し様々な取組みを行う中、訪日外客数は昨年一九七三万人を超えた。そして東京オリンピックに向けて日本各地でホテル開発ラッシュが続いている。単に箱をつくるのではなく、多様な訪日外客に異国文化を楽

しんでいただけの観光資源を長期的な視点でつくることが重要だ。

そんな場づくりを通して、地域経済の復興、コミュニティの再構築に貢献したい。地域再生の先進モデルである隠岐郡海士町曰く、よそ者、馬鹿者、若者が街づくりには大切だ。私もその一翼を担いたい。

最後に、「老人と海」という本は、他者との比較ではなく、自らの想いにまっすぐに生きることの大切さを教えてくれた。情報が溢れ、環境変化が益々早く、大きくなっている時代。そんな生き方を大切に、時代の荒波を乗り越え行きたい。いつかライオンの夢を見られるように。

(株式会社ワンブロック代表取締役)

郷土を知ること

井 田 も も (平成23年卒)



松阪市にある本居宣長記念館で学芸の仕事に就いて二年になります。ご承知の通り、江戸時代の国学者として知られる本居宣長ですが、『古事記伝』をはじめとする著作の稿本や書簡、蔵

書など、数多くの資料を残しています。

また、六十年間生活した旧宅も保存され、主に、そういった資料の管理・公開といった業務に携わっています。

また記念館は今年、耐震補強を兼ねた改修工事を行っており、来春のリニューアルオープンに向けた準備にも取り組んでいるところです。地域に根ざした、より親しみやすい博物館であることを目指して、試行錯誤の毎日です。

さて、突然ですが、皆さまは、自身

の地元の歴史についての程度ご存知でしょうか。深い造詣をお持ちの方であれば、全く興味がないと言われる方もいらっしゃるかと思います。恥を忍んで告白すると、私自身は現在の仕事を始めるまで、郷土の歴史について深く知ることとはありませんでした。根っからの文系で、津高在籍中から歴史、特に日本史に興味はあったのですが、歴史というのはどこか、今の生活とはかけ離れたところにあるものだという感覚を持っていました。

しかし、展示解説の傍ら、来館者とお話をさせていただくと、ご自身の地元について語るこのできる方の多さに

驚かされます。ふとした言葉に反応して、そういえば、私の地元にはこういう人がいる、こういう謂われのある場所がある、と思いがけず教えられることも一度や二度ではありません。

津高の正門からほど近く、伊賀街道の通る八町には、宣長と同時代を生きた国学者・谷川士清の旧宅が保存・公開されています。また、JR・近鉄の松阪駅前には、大きな鈴のモニュメントが置かれ、町を歩くと、鈴をモチーフにした図柄や名前をよく見かけますが、これは、宣長が浜田藩主から拝領した駅鈴と呼ばれる鈴が元になっています。

宣長は享保十五年(一七三〇)松阪本町に生まれ、医者を本業としながら日本の古典研究に努めた人物です。江戸時代の学者ということ、江戸を拠点にしていたという印象を抱かれています。方も多いのですが、実は生涯のほとんどを松阪で暮らした土着の人なのです。こうしたことから、松阪市内の小学校では、宣長を郷土教育の一環として取り上げており、春秋の遠足シーズンになると、小学生が見学に訪れます。こどもたちは皆、活き活きとした表情で話を聞き、沢山の質問をしてくれます。

自分たちの生活している土地と、自分たちの知っていることが繋がることの楽しさに、目を輝かせる子どもたちの様子に、歴史というのは、存外身近に思っているものなのだと、肌で



篠原 誠氏

「面白いこと」とは何なのか知っている人。それが私の篠原さんに抱いた第一印象だ。元々「三太郎」CMの大ファンである私は、あんなに斬新なことを考へつく人が津高の先輩だなんてとても驚いた。講演中、あのCMをつくった人が目の前にいるのだと実感するたびに気分が高揚してぐくぐくした。きっと篠原さんはああいう創作の道を志していて、夢に見合つ才能もあって、それを大々的に叶えたすごい人なのだ

有造塾に参加して

二年 廣 真 琴

ろつと想像していた。しかし、実際の篠原さんは私が思い描くような雲の上の人ではなかった。むしろごく普通に学生生活を謳歌していて、私たちと同じように進路に迷っていた時期もあったと知ったとき、心のどこかでホッとする自分がいた。そして日々の苦勞をポジティブに乗り越え、それを軽快に語る姿に励まされ憧れた。やりたいことが見つからない不安も「こんなことをやったところで何の意味があるのか」という疑問も経験している人だからこそ、篠原さんの「意味がないことはない。意味がないと思うなら、自分で意味をつくれればいい」という言葉はまっすぐ胸に届くのだと思う。

高校生活の折り返し地点を通過した私は、いつでも未来の選択を迫られて

いる。その状況に置かれているのはみんな一緒に私だけではないとわかっていても、結局は独りでその選択肢を一つに絞らなければならない。進路選択の正解なんて誰も教えてはくれない。進んでみなければどうなるかわからない。これから先、そういう場面に数えきれないほど何度も遭遇するはずだ。そんなとき、私は篠原さんの言葉をもう一つ思い出さだろ。「広告には答えがないのではなく、答えがたくさんある。それは人生も同じだ。すべてに意味がある。正解が一つだとは限らない。」だからもっと自由に、何でも楽しんでしまえばいいのだと篠原さんに教わった。



進路状況

進路指導部 笹山 基起 (平成5年卒)

平素より、本校の教育活動、並びに進路指導にご理解とご協力を賜りありがとうございます。心より感謝申し上げます。

さて、私は、昨年より進路の主任をさせて頂いておりますが、今年で津高校十年目になります。その間、多くの生徒達に出会い私自身を教師として鍛えてくれました。高校教員はいつも十五から十八の子どものたとともに生活しています。そのような環境に甘え、ともすれば生徒を「子ども」としてのみ扱いがちであります。私も赴任当初はそうでした。しかし、津高校の生徒たちと関わっていると自分の「大人」としての幼さに気づかせてくれます。親として子の自立を願うように、教師としても子どもの自立を願い、生徒に対しては「私の教師として最後にできることは自立に向けて背中を押してあげる」ことだけ」と思つたようになりました。これが正しいかどうか、子どもたちの将来のキャリアにどう影響を及ぼすかはまだ分かりません。津高校の教員に求められる資質とは何か、常に自問自答している十年目でございます。

昨年度の卒業生たちも大変よく頑張りました。自立した社会に飛び立つ津高生たちを是非応援して頂きますよう同窓

生の皆さまには重ねてお願い申し上げます。

(大学合格者数)

	国立	公立	私立	短大 その他
(2016) H28年	194	35	748	15
(2015) H27年	192	38	780	7
(2014) H26年	230	51	766	16
(2013) H25年	207	34	535	14
(2012) H24年	237	26	762	21

	北海道	東北	関東	一橋	東工大	名古屋	三重大	三重・医・歯	京都	大阪	神戸	九州	慶応	早稲田	同志社	立命館
(2016) H28年	3	0	3	1	0	22	64	7	13	11	10	2	6	7	69	113
(2015) H27年	3	2	3	1	1	22	60	4	12	14	5	1	5	13	92	106
(2014) H26年	7	1	4	0	0	15	68	10	10	14	11	0	2	17	76	116
(2013) H25年	10	1	4	1	0	8	66	9	15	17	12	2	3	17	59	70
(2012) H24年	6	1	5	1	1	17	65	10	13	26	14	1	4	11	88	101

津高同窓会ゴルフ大会

伊藤 宏 (昭和54年卒)

五月十日、五月晴れの元で恒例の津高同窓会ゴルフ大会が三重白山ゴルフコースで開かれました。

今年は一六一名の同窓生が参加、盛大に開催されました。

例年と違って他の学年の方々と一緒にラウンドすることができ、より一層楽しくプレイすることができました。

私も昭和54年卒業生チームは、天候に恵まれ、パートナーに恵まれ、そして何よりハンディホールにも恵まれ、参加しました四人中三人がネットでアンダーパーを記録し、念願の優勝を果たすことができました。一緒に参加していただいた田中君、篠木君、酒井君に感謝いたします。

他高校出身の方々にお聞きしても、



毎年このように大勢の同窓生が学年をこえて参加されるゴルフ大会はあまり聞いたことがないとのこと。津高校の同窓生であることの喜びを感じるとともに、誇らしく思っております。

第六回津高同窓会テニス大会

井川 俊 二 (昭和43年卒)

リオ五輪で錦織圭が九六年ぶりに表彰台上がった活躍は記憶に新しい。

我が津高においては、昨年は雨のため中止となり、十月十六日に二年ぶりのテニス大会が盛大に開催された。

津高卒業生による参加者は、昭和二十九年卒の最古参から平成十二年卒の壮年者まで幅広く、これに現役テニス部員の若年者二十名を加えた総勢六三名であった。

競技は、八チームで行われ、傷みの激しいサンドコートにもかかわらず、現役世代の強力サーブに負けずに立ち向かい、イレギュラーするボールに足を取られながらも老体に鞭を打ち、何とか、我がチームは三位に食い込み賞品の恩恵にあずかることができた。テニス競技での交流もさることながら、現役時代の母校での思い出がよみがえり、世代を超えての談笑もあちらこちらで見られ、旧交を温めるよい機会であ

今後ぜひ参加したいと思っておりますが昭和54年卒業生は今のところ参加者が少ないので、ゴルフをされる方々はぜひご参加くださいますようお願いいたします。

最後になりましたが、毎年このような盛大な大会を企画・運営していただいている同窓会事務局の皆様、関係の方々に深くお礼を申し上げます。

あった。

当テニス大会も六回目であるが、平成卒の参加が少なく、運営、準備等を



各地で同窓会開催

東京同窓会

本年度の津高東京同窓会は、五月二十八日、霞が関ビルにて、百九十一名の参加を得て開催されました。

総会では、田村会長並びに来賓の方々よりご挨拶をいただき、親睦パーティに移りました。

恩師の出口健正、青山雅樹両先生をご紹介した後、西本和子さん(昭和44年卒)による邦楽落語に笑い、谷篤

昭和卒世代に負っている現状もあり、この拙文を一読された同窓生の参加を多いに期待したい。

顧問のご支援に感謝するとともに、競技に際しコートの整備、準備、後片付け等、奔走していただいたテニス部員諸君に謝意を表し、来年の大会も大いに盛り上がることを願っている。

さん(昭和54年卒)による歌唱に全員が聴き惚れました。

恒例の席替えは、生まれ月別にテーブルを分け、全員がマイブーム(最近ハマっていること)等を話しました。時間を忘れて楽しいコミュニケーションの花が咲き、皆さんに好評だったようです。

新会員として今春大学に入学された魚住あかりさんの挨拶、来年度幹事の奈良谷弘さん(昭和45年卒)の決意表明があり、最後に、谷篤さんの歌唱指導により全員で校歌を合唱し、来年の再会を約してお開きとなりました。

丹羽敏春 (昭和44年卒)

名古屋同窓会

平成二十八年九月十七日土、名古屋東急ホテルにて津高名古屋同窓会が開催されました。

総勢百十五名の先輩後輩が集い、例年同様に賑やかな会となりました。

今年は、昭和45年卒石崎 豊様をゲストとしてお招きし、ご講演いただきました。





石崎様は、小学校教諭を経て現在は
社会人落語家、「切磋亭琢磨」として
活躍中です。

自らの津高時代、教師時代のお話を
交えながら大変楽しい講演をいただ
き、時間が過ぎるのがあつという間で
した。謎かけや干支と日本昔話を使っ
た小断もしてくださり、会場全体に笑
いが起こっていました。また、世代ご
とに分かれた各テーブル対抗の〇×ク
イズも例年通り楽しい雰囲気で行われ、
最後は皆さんで校歌を熱唱し、来年の
再開を約束してお開きとなりました。

田中千裕 (平成20年卒)

大阪同窓会

第五十回大阪同窓会が十一月六日に
例年通り天王寺都ホテルにて行われま
した。

記念大会の今回は例年を大きく上回

る百七十五名の参加を得て盛大に行わ
れました。

奥田 務大阪同窓会会長、来賓の方々
の挨拶を頂戴した後、三重大学学長・
駒田美弘氏(昭和45年卒)より「地方
創生における大学教育の役割」のテー
マで時宜を得たお話をいただきました。
その後、津高音楽部OB前迫 實氏
(昭和42年卒)のカンツォーネは、ス
タンディングオベーションの拍手喝采
でした。

また、アトラクションの一つとして
開宴時の卒業年次別席順から、参加者
居住地ごとのテーブル席替えを実施。
先輩・後輩入り混じったテーブルで懇
親を深めました。

最後に、現役大学生の紹介に続き懐
かしい校歌の合唱をしながら来年の再
会を誓い合いました。

岡 和夫(昭和45年卒)



物故者

(平成28年10月24日現在) (敬称略)

謹んでご冥福をお祈りいたします。

旧職(15) 家 垣 岩 雄
旧職(19) 杉野(前橋)卓治
旧職(24) 杉 浦 茂 夫
陳川昭 3 野 崎 嘉 英
昭 5 野口(近藤) 晋
昭 6 山 口 卯 三 郎
昭 9 小 泉 祐 次
昭10 佐 野 滋
昭12 村 田 直 方
昭12 吉 村 好 美
昭13 田 中 幸 一
昭14 別 所 源 郎
昭15 伊 藤 敏 幸
昭15 西 野 節 蔵
昭17 倉 田 正 大
昭18 金 児 彰
昭18 倉 矢 納
昭18 竹 岡 平 一 郎
昭18 東 隆 男
昭18 藤 川(林) 英 男
昭19 川 北 浩 三 郎
昭19 村 田 快 夫
昭20 加 藤 行 昭
昭20 宮 崎 実
昭20④竹 内 愛 三
昭22 加 藤 精 一
昭22 黒 川 武 夫
昭23 川 本 正 大
昭23 柴 田 伸 彦
昭23 服 部 達 雄
昭23 長谷川 毅
昭23 藤 田 行 雄

昭23 別 府 房 夫
昭23 堀 内 光 也
昭23 丸 山 哲 生
昭23 村 山 昇
昭24 太 田 二 郎
昭24 岡 田 晃 一
三重桜 2 竹島(野村) 芳子
昭 7 平田(北川) 美津
昭 8 岩砂(西田) 房子
昭11 松田(鈴木) 千里
昭12 吉本(大原) 志 子
昭13 川村(服部) とし子
昭13 後藤(川喜田) 知子
昭14 吉川(若林) 瑞枝
昭16 後藤(草川) 久子
昭16 野田(藤田) 順子
昭16 服部(田中) 善子
昭17 萩原(加藤) 勝子
昭17 吉 原 信 子
昭19 飯田(川喜田) 玲子
昭19 北住(丸本) 利枝
昭19 原田(鈴木) 衣
昭19 藤 田 辰 子
昭19 山本(内田) 久枝
昭20④岩崎(岩崎) 和子
昭20④喜多(渡辺) 翠
昭20④戸田(三宅) 美砂子
昭20④中岡(吉田) 哲子
昭20④森 田 笑
昭20④渡辺(松島) 貞子
昭24 海野(田中) 千代
昭24 西村(西村) ム 代
昭20入森内(森川) 啓子

昭20入服部(福岡) 郁
昭20入近藤(前田) 貴美代
昭20入玉置(玉置) さよ子
昭20入井谷(細野) 弘子
津高 昭24 阿 部 清
昭24 北 野 幸 子
昭24 北村(倉田) 悦子
昭25 足 立 進
昭25 伊東(伊東) きぬゑ
昭25 伊 藤 務
昭25 田 中 将 介
昭25 服 部 俊 亮
昭26 大 田 治 男
昭26 坂口(黒川) 照子
昭26 田 畑 二 生
昭26 柘 植 敏 孝
昭26 中山(森) トヨ子
昭26 福 井 儀 郎
昭26 村木(服部) 久子
昭26 村田(川上) 千津子
昭26 楠 洋 子
昭26 大西(岡) 洋子
昭26 酒井(長谷川) さい
昭27 斎 藤 正 美
昭28 渡辺(水谷) テル子
昭29 久 保 勝 司
昭29 近 藤 好 徳
昭29 坂 倉 康 雄
昭29 三 浦 和 子
昭30 馬 岡 眞 人
昭30 服部(清水) 京子
昭31 大 川 巖
昭31 津 田 幸 郎
昭32 倉 田 護
昭32 桜井(平野) ヨン子
昭32 清 水 香 澄

昭32 杉 谷 次 雄
昭32 古 田 晃 晃
昭33 柴 田 定 康
昭33 渡 辺 碩 也
昭33 岡 昭 正
昭34 園 田 尚 一
昭34 山 中 一 馬
昭34 幾田(川井) 喜代子
昭35 野田(川口) 義寛
昭35 松 岡 満
昭35 丸 山 晃 一
昭36 伊 藤 健 義
昭36 稲 葉 信 洋
昭36 小 菅 俊 健
昭37 小野寺 英 之
昭37 鈴 木 德 邦
昭37 宮 原 光 弘
昭38 岩 田 淳 一郎
昭38 岩 名 昭 治
昭39 吉村(天野) 利 一
昭41 松 村 孝 司
昭41 水 口 孝 司
昭42 小 寺 孝 司
昭42 杉本(柴田) 栄子
昭42 松 田 秀 雄
昭43 上野(原田) 博子
昭43 河 邊 成 和
昭43 別 所 研 二
昭45 安 井 英 太
昭50 井 土 幸 子
昭51 草 川 幸 政
昭51 浅 井 美 司
昭51 中 庭 寿 一
昭57 伊 庭 直
昭59 高 山

お知らせ

平成二十九年 総会・パーティー

日時 平成二十九年八月五日(土)

午後三時より

場所 津センターパレスホール五階

津都ホテル五階

テーマ 「帰去来 ふるさとを想う」

担当学年幹事

昭和59年卒(代表 東口 大介)
平成8年卒(代表 小田 篤子)

平成二十八年年度総会・パーティーを終えて

松山 洋介(平成7年卒)



去る八月六日(土)津センターパレスホール及び津都ホテルを会場に「今、回想のとき そして、出発のとき」をテーマに、平成二十八年度陳川・三重桜・津高同窓会総会・パーティーが盛大

大に開催されました。その日は例に漏れずとても暑い日でしたが、八二七人の方々にご参加いただきました。総会では物故者への黙禱、飯田会長・中川校長のご挨拶、代議員会の報告が

平成二十九年年度総会・パーティー

実行委員長 東口 大介(昭和59年卒)

平成二十九年年度陳川・三重桜・津高同窓会総会・パーティーは、昭和59年卒と平成8年卒が担当させていただきました。

十二年前、昭和47年卒の先輩方の副幹事を務めた時から、このパーティーはとも少人数の力で開催できるものではなく、また副幹事学年との連携は絶対に欠かせないと感じ、少しずつ親交を深めつつ心の準備をして参りました。

行われ、続くパーティーでは陳川・三重桜昭和18年卒の先輩への最高齢者インタビュー、ボラロイド撮影隊、昭和58年卒フォークソング部とともに懐かしいの歌を会場の皆さんと大合唱など、手づくり感溢れる企画をお楽しみいただきました。また、恒例の応援団OBによる演舞で盛り上がり、最後の校歌斉唱では皆さんが総立ち、中には感極まって涙する方もお見えになり、母校を愛する心の強さ、まさに「津高愛」を感じることができた瞬間でした。

ピンク色のTシャツに身を包み、伊勢志摩サミットに負けないおもてなしをと意気込みましたが、不慣れな部分が多く、幹事として至らない点も多々あったこと存じますが、また来年も元気なお姿で皆様と再会できることを

参加者募集

★第八回 学年対抗ゴルフ大会

日程 平成二十九年五月七日(日)

場所 三重白山ゴルフコース

〇五九二六二四二三

参加費 一二、五三〇円

〇プレー費・昼食・コース売店・

パーティー代・会費含む

キャディは別途

定員 百六十名(定員になり次第〆切)

※厳守・各学年三名以上十六名以内

※練習ラウンドの設定あり

※お問い合わせ・お申し込み先

津高同窓会事務局

〇五九二二九七三三二

熊本地震へ義援金

四月十四日熊本に震度7、十六日深夜再び震度7の地震が起こり大きな被害が発生しました。被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

熊本・大分在住の同窓生は十七名おられます。

同窓会では六月七日、飯田同窓会長より日本赤十字社を通じて十萬円の義援金をお届けしました。

事務局だより

〇会報五十四号をお届けします。今回は二万五千三百部の発行です。

〇事務局は、月・火・水・金曜日の午前九時〜午後四時開局しています。

〇住所異動の際は、卒年・名前・新住所をお書きの上、誓書・FAX・メールのいずれかでお知らせください。

〇最新情報は、是非、ホームページをご覧ください。

津高同窓会のホームページ

<http://tsuko.jp/>

メールアドレス
office@tsuko.jp

TEL・FAX 059-229-7331